

三重国語の会・藤原和好監修

『語り合う文学の授業』

本書は、藤原氏を中心にした三重国語の会が、「文学の授業での読みは本当に子どもを解放しているか」という疑問を出発点にして、「豊かな人間認識を育てる」ことをめざし、教材分析、指導計画に取り組み、まとめたものである。

まず、原理として、「豊かな人間認識、世界認識を育てる文学の教室」について書かれている。この中で、従来の読解主義の弊害を一つ一つ上げて、現状の文学の授業の中では、子どもが疎外され解放されていないと指摘している。つまり、建前の世界

に閉じこもって本音が出せないという疎外と、本音自体がすでに疎外されていると言った二重の疎外に囲まれているということである。その疎外から解放するために、

- (1) 生活を見つめる、
- (2) 人物の全体像と向き合う、
- (3) 生活の中で読む、
- (4) 作品の思想に出合わせる、といった読み方を提唱している。

そして、子どもの内より生じる本音を本当に語らせるために、作品の思想をえぐる教材分析を考えている。その観点は、

- (1) 教材と子ども、
- (2) 作品の思想、

(3) 作品に描かれた世界、(4) 作品中の人物像、(5) 作品の組立て、(6) 授業のポイント、という六つであり、またその一つ一つに小項目が設けられている。

さらに、指導過程にも目を向けて新しい方法を考え出している。それは、「出会い」、「読み深め」、「交流」と名づけられた三段階の指導過程である。つまり、「出会い」(一次感想)において本音を出させ、「読み深め」において作品世界を全体的にとらえ、その過程で、読み手の認識を揺さぶり、変革させ、「交流」において他人の価値観(人間観・世界観)にふれ、自己のそれを豊かにしていくという指導過程で、読み手の人間認識を豊かにすることをねらいとしているのである。

次に、実践的には、こうした教材分析の方法や指導過程をふまえたうえで、以下に掲げる作品を例にして、実際に教材研究や指導計画の立案を試みている。

作品は、おおきなかぶ、かさこじぞう、ごんぎつね、かけ、つけもののおもし、茂吉のねこ、おかあさんの木、井戸、石うすの歌、大造じいさんとガン、あとかくしの

雪、やまなしの十二作品である。これらすべてに作品の思想に迫るための教材分析がなされ、それに基づいた指導過程が考えられている。例えば、「おおきなかぶ」では、「集団の力」、「協力」、「小さな弱い存在の見直し」といった思想に向かって、「読み深め」の段階で、かぶぬきのシーンを十分にイメージ化させ、「交流」の段階で、「協力」の素晴らしさ・楽しさを実感させるといった指導計画が考えられている。

このように、豊かな人間を育てる文学の授業をめざしている本書は、文学教育を考える人にとって、子どもの認識を豊かにするための三段階の読みを提唱し、それに従った独自の指導を考えている点で、示唆を与えるものである。

(A5判、三〇〇ページ昭和六十三年六月二十五日、自費出版)

(石原 淳)